小田原史談

第５５号
発行所　小田原史談会
小田原市城内3—22
郷土文化館内

新春御慶

会長　中野敬次郎

昭和四十五年は、私たちの小田原史談会も創立以来十五周年を迎えることになりましたので、これを記念する意味も含めて、今迄に会で発行した「小田原史談」を総括して一単行本として出版する計画をたてました旧臘すでに印刷の大半を終ったので、正月中には皆様の手元にお届することができるかと存じますが、顧みれば、会報だけでもすでに五十五号を発行しており、それには毎回会員のいろいろな研究や調査が発表されておって、その他の行ってきた仕事と併せて考えるとこの十五年間に小田原史談会が果してきた歴史解明の役割は相当の業績をあげ得たものと信ずるのであって今日までこれらの運営に当ってこられた先輩諸賢に深く感謝を捧げるとともに、この記念の年に立って、会員諸兄一体の協力によって会の発展に一層の力をつくしたいと感ずる次第であります。

たまたま、今年は小田原市にはいろいろ意義の深い年でありまして、先づ市制施行三十周年記念の年であります。また、今日の小田原の文化と都市の基を築いたいわゆる後北条文化の全盛期の文武の名将北条氏康が元亀元年歿して以来の丁度四百年記念の年でもあります。更に、その北条氏滅亡の三百八十年忌にも当ります。

天正十八年の小田原落城ということは、それ自体は小田原にとって目出度い言葉ではありませんが、北条氏一世紀間の業績と文化との再認識は、この日から測って考えられるのであり、戦国時代の時局はこの事件を最後として舞台の幕を下されて新しい安土桃山時代が展開されて行くのであります。小田原としても従来の中世的城下町としての武力都市から、近世的宿場町としての平和都市に移って行くのでありますから、北条三百八十年忌はたしかに小田原の記念の年というべきでありましょう。

近代都市としての小田原と雖も、伝統文化の集積を土台としてその上に立っているのであって、その基盤の文化を正しく認識することによって、将来の大発展が期されるものでありまして人間生活の歴史の研究と解明を本元として結成された私達小田原史談会の使命は小田原の発展と変貌の進むにつれて、更に重要さを加えるものと確く信ずるものであります。会員諸兄に新春の御慶を申し上げるとともに、今年は特に各位のご健斗を切に願う次第であります。

昭和四十五年元旦

謹賀新年

庚戌元旦

会長　中野敬次郎
副会長　立木望隆
〃　内田武雄
〃　額田喜代春

第一回　武田信玄史蹟巡り

——旅行記——

加藤誠夫

我が小田原史談会は去る十一月九日箱根登山会社のバス一台にて、甲州の武田信玄公の御遺蹟を巡り、公の御遺徳を此の肌に感じ取ったのです。

会員は午前七時バスの人となり、大井町に向い東名道路を折からの紅葉を車窓に愛でつゝ御殿場より籠坂峠を越して、五湖の一つ河口湖より山中湖と窓外の風景は瞬時に変転し、御坂峠の新トンネルの照明に目をうばわれ、時代の進歩する様を見て、口々に夫々の言葉がもれた、バスガールの美声で一層人々の心を浮き立てた。

御坂を越へてから、あたりの家の建て方や地勢が甲州らしいムードで一行をなごやかに包んで呉れた。

バスはやがて少時市内を走り、甲府城跡入口で止まった。

一行は喜々として天主台の石畳の上に登り、中野先生から此の城にまつわる興亡の史談を拝聴し、江戸初期築城の平城であることが判った。再びバスは、市内を走り、程無く武田神社に着く、中野先生の御話に依ると、武田氏は代々此処に居住し、つつじが崎館跡だとのことで、信玄公の御墓も此処にある。バスはつまさき上りに走り山腹で下車しそれより徒歩となり、間もなく境内のすばらしい積翠寺に着いた。

大門の両側に、新らしい風林火山ののぼりも時を得たりと立てられ、如何にも信玄公の誕生せしお寺にふさわしく、一行と共に本堂に休息して中食を取り、裏庭の名園をながめ、それに続く産湯の井戸や本堂わきの小堂内に安置された、信玄公の座像の前にぬかずき、永正の昔をしのび、寺後の山岳と相まって、典型的な山城の様子も知った。

午後は甲州特有の枝もたわわにうれた柿の中を通過し名高き善光寺に詣でた。

長野県にある善光寺を見た私は、今同じ様式の色あざやかな大本堂に向った時、実に其の美にうたれた。

堂内に入り、暗い段々を手さぐりで下りて、カギをカタ〳〵いわせたが、全くの暗やみの夜を一人して巡るハカなさに、つい二度迄も

同じカギにふれて漸く戻って来たのである。昔永禄元年に武田信玄公が其の戦禍に遭うのを恐れて本尊及び其の他の重宝を此の地に移させたのが始めとのことです。

本堂は、天明二年の建造で高さ九丈六尺、間口十六間奥行二十五間、内陣は、二十二本の柱に全部金が塗ってある。

定朝様式の平安仏が向い合わせに左右に据えてあり、全く去り難い。

バスは、笛吹川べりを北行し、季節の香をまだ残す、色ずいた甲州ブドー園の間をつゝ走った。上流に来た頃バスガール嬢が武田氏最後の決戦のお話をして呉れた。

激戦で勇士の流した血は三日の間にわたったとのことで、此のあたりで小川の名も「三日血河」と呼んでいるそうである。

我々一行が最後に訪れた寺はもう近い。

道の左右に桃畑が続き、又真赤にうれた柿の実が特に印象的だった。

此処臨済宗の古刹恵林寺は幹徳山と号し、昔夢窓国師が元徳二年に建立した寺で山門をくぐる事三度、最後の門は楼門で、天正十年武田氏滅亡の時、快川国師は此の中に籠り、「安禅必ずしも山水を須いず、心頭を滅却すれば火も自ら涼し。」と叫んで自ら泰然として、火定した。誠に有名なお話で、中野先生の御説明は、増々熱気を感ずる如く、あの音声が、しずまり返へった木々の間を通りぬけて行くかとあやしまれた。

寺後に武田信玄公の御墓所があり、庭中の片隅に小さくて物さびしい宝篋院塔が一基、此れは信玄公の父信虎公のお墓と聞いて、ひとしをあわれをもよをした。

此の寺の名園は、池泉廻遊式とて、夢窓国師の造園と聞いた。庭の木々は紅葉し然も秋なのに珍らしく花菖蒲が咲いていた。

堂内に等身大の不動明王の座像が、寺僧の特別の御計らいで、開扉され、公三十五才の時たくましき御姿を写させたとて、力重あふれる身体つきがうかゞわれて誠にうれしかった。又宝物館内の風林火山の大きな金文字の織旗と、諏訪大明神の赤い大織があり、何時も戦場に立てられた物だと思へば、身のしまる思いがする、他に数々の重宝が陳列されていて、いつまで見ていてもあきる物ではない。

一同は今日の記念にと、午後の日射しを体一パイにあびて、なごやかな処をばちりカメラに納まった。小田原に着いたのは午後七時で折からテレビが「天と地」の小田原城総攻撃の場面を写し出し、城主北条氏康と上杉謙信との対決であって此れにも間に合って良かったと思った。

刀工清水久義の墓

中野敬次郎

幕末の小田原の刀匠として知られる清水久義の墓石が今夏（昭和四十四年）発見されたことを聞かされたので、秋十月の一日私はその墓を見に行った。墓のある場所は足柄上郡松田町神山の神山綿株式会社の裏手に近いところで、田圃に囲まれた百余坪ぐらいの墓地があってその中にあった。

その墓地は十数軒の家の古くからの共同墓地であるがコーヤマ株式会社の社長鍵和田家の墓もあって、その中で発見されたのである。

墓石の表には「鉄道江林信士、剱工惣五郎源久義、江顔智葉信女」の文字が三行に並べて刻してある。「鉄道江林信士」が久義の諡号で、「江顔智葉信女」が久義の妻の諡名である。

久義の没年月については墓石の側面に「嚶応四年辰年九月十五日」と刻してあるので、嚶応四年つまり明治元年であるが、年齢は不明である。妻のも一方の側面に「明治五年八月十五日」と没年が記してある。

鍵和田家の菩提寺である松田町惣領の延命寺を訪れると、寺の過去帳にも明治元年九月十五日のところに「鉄道江林信士、神山清水惣五郎事」とあり、妻については、「江顔智葉大姉、明治五年八月十五日、神山、李左衛門、綿屋祖母」とあった。

久義の妻は、夫に数年おくれて明治五年に没しておるが、この女性を「李左衛門綿屋祖母」とあるので、これによって久義の素生がわかる。鍵和田家の伝えでは久義は家を継ぐべき人であったが、家を出て刀工となったので、今は弟の家柄だと言われているが、同家は明治以前の天保時代から製綿業をやっており、松田の綿屋として知られた古い家柄であったが、久義の妻が明治初年の綿屋鍵和田家の当主李左衛門の祖母であるところを見ると、久義は現在のコーヤマ株式会社会長鍵和田勝治氏の数代の祖先であるが、家業を子息、又は弟に譲って早く家を出たらしく、綿屋の主人李左衛門は久義の孫に当るわけである。それ故、久義は本来なら綿屋の職業を継ぐべき人であったことや、彼の墓石が鍵和田家代々の墓の列に入れられてある理由が解かるのである。

鍵和田家過去帳に妻の場合は「李左衛門綿屋祖母」という割書が特にしてあるのに、久義のは誰の父とも祖父とも記してないことや、惣五郎という名などから推定すると、彼は入婿の養子であったのであろうと思われる。

刀工となってからの久義が清水という姓を名乗ったのは、綿屋鍵和田家のあるあたりの土地が、松田町神山の上清水、下清水という字名で呼ばれたところであったかららしい。

久義の作品には単に「清水久義作」と刻したものの他に「相州清水宗五郎久義作」「相模国住人源久義造」などと銘を切ったものが多いから、江戸で修業して後に一家をたてたからは、故郷の松田神山と小田原に住んだようで、小田原では新宿町に住んだといい、山王原に住んだというが、今ははっきりした地点がわからない。彼の作品には宗五郎と銘を切るものが多いが、墓石からすると本名は惣五郎であった。

久義は武蔵国江戸の巨匠細川正義の高足の一人である細川正義は幕末に江戸で流行した水心子一派で、その盟主水心子正秀門下の逸材の一人である。

水心子派の鍛法は相州伝と

備前伝を最も得意とし、細川正義の如き、末相州の香味が強いから、相模の人久義もこの故に、江戸に出て細川門下に入ったものと思われる。

水心子一派は、正秀の門人で細川正義と同門の結城正武が、早く小田原に入って江戸に住んだ。義重、保則久友などの門人もいる。

最近見た刀の拵に、鯉口に「為久義、定勝作」と刻したものに、「源行秀」と切った鉄鍔をはめたものがあった（中身は変えられている）が、源秀行（左行秀でない）は、細川正義の門人であって、久義とは同門であるし、定勝については、小田原地方で流行したようであるから、久義の動行も推察できるというものである。

藩校集成館で鞋鎚している事実もあるので、幕末には

久義には多数の門人があるが、特に知られているのは左行秀（土佐の名工）である。

またやや世にあらわれた刀工に立花円竜子を名乗った川井久幸があった。久幸は

・この人のことが私には明かでないが「為久義」と切っているのを見ると、同門か門弟かであろうが、何れにしても、「久義の為めに」とあるところからすると、久義の依頼によって造ったものか、久義の帰郷記念に造ったものか、とにかく久義に関係のあるものとして面白い発見であった。（小田原城天守閣展示）

清水久義については語るべきことが多いが、ここには墓石発見の紹介のみにとどめる。

刀匠の墓石がその出身地に残っているのは珍らしいことである。

北海道開拓者

大友亀太郎翁

内田武雄

北海道開拓百年史にあたり、テレビ、アイウエヲで御存んじの方も多い事と思いますが、小田原市内にこんな人がいた事はあまり知られていません。大友亀太郎さんは小田原市大友の人でした。旧姓は飯倉でしたが十四代将軍徳川家茂公の前によばれおまえはどこの生れかとたづねられた時に私しは大友ですとお答えしたので、本日よりあらためて大友と名のれとのおゝせにより大友亀太郎と名のる事になりました。

札幌元村の開祖　沿いの地方ばかりでなく、内陸部も積極的に開発しようとした箱館奉行では、木古内村、大野村の開墾に成果を示した大友亀太郎を、蝦夷地開墾掛、に起用し、石狩場所の篠路、発寒、厚田方面の開墾見込みを調べさせる事にした。

一八六六年（慶応二年）四月のことである。時に亀太郎三十三才、農夫高木長蔵らをしたがえ、はじめて石狩の地を踏んだ。

箱館奉行が、西えぞ地の開発に手をつけたのは、これより先き十年ほど以前の一八五四年で、千歳越えの道を石狩まで通し、農平川のほとりに常住者を置くとともに、発寒を在住地と定めて、武士やその配下の農民を移住させた。

したがって現在、札幌市内となっている琴似や篠路にもすでに若干の定住者がいた。

そこで亀太郎は、開墾がおこなわれている篠路や発寒をすて、また、厚田は交通不便の理由から候補地よりはずし、のちに元村（札幌村となり、その後札幌市に合併。今の元町）といわれた一帯を開墾地に決定した。

案内にたったこのあたりの地理にくわしい篠路居住の早山清太郎が、ここは樹木があって小屋がけの便があり、なによりの地味の肥えているからと勧めた意見を採用した結果である。

このあたりはそのころ、森林と広野がいりまじった原始のままの姿で、南北に小道が一本通じているだけ全く無人の地であった。亀太郎は野宿を繰り返しながら人夫を励まして、まず人馬が通れる道路をつけ、川に橋をかけ、移住者受けいれの準備を整え、翌六七年四月、箱館近郊から二十余戸七十人の農夫を移して本格的な開墾にとりかかった。

移民の土地は間口約五十六メートル、奥行きは伏籠川までとしたため、長短はあったが、平均して百メートル前後大体一ヘクタール余であった。二年間はおとな子どもの別なく、一人扶持玄米一日五合（約七百五十グラム）を与え、十三年間税を免除の方策をとった。

かれは開拓使が設けられた一八六九年までここに居住に当たり、それまでに田畑約四十ヘクタールを開墾した。畑作を主として大麦、小麦、そば、あわなどを植え、水田も十アールほど試作した。これにたいする石狩　勧農方の費用は一カ年三千両であった。

〃大友堀〃　札幌の街に開削　四季おりおりの風情をそえる創成川は、もと〃大友堀〃といった。

亀太郎が開墾地の人びとの飲料水に、また、物資運輸の水路に、さらには、将来の水田かんがいに供しようとして開削したものである。

水路は豊平川の支流胆振川から、いまの南三条橋辺まで斜めに堀り、ここから北六条橋のところまで直線に進め、さらに東北に向け、元村本通りの北側を通して伏籠川に注がせたものである。長サ八キロ余、深さ百五十センチ余、六六年、六七年の二カ年にわたる工事で、毎日四、五十人の人夫が出役し、一万両工事といわれた

いよいよ工事が完了して

通水はみごとに成功した。堀を満した水は、ゆるやかに、よどみなく南から北に流れ、豊平川の清らかな水が開墾地に達した。飲み水の不安から解放された人びとは、歓声をあげてよろこんだ。

連日、現場をまわって工事を督励した亀太郎の感慨はひとしおであった。

この〃大友堀〃は、のちに開拓使が札幌経営をはじめるようになってから、さらに北へ新川が開削されて舟運の水路となり、川の水はいまにのこる亀太郎の大きな功績である。

報徳精神を実践　亀太郎は、一八三四年四月二十七日、相模国足柄下郡西大友（今の神奈川県小田原市のうち）の農家飯倉吉右衛門の長男に生れた。子どものころから読み、書き、そろばんを好み、十五、六歳のころ早くも家計のことで父の相談相手になっていたという。

この時代に生きた二宮尊徳を深く敬慕し、入門を志して一度は家出までした事があった。かれの熱心な願いに、父も正式に許してくれたので、よろこび勇んでこのころ下野（栃木県）の今市にいた尊徳のもとに旅立った。

二十二才の時である。入門がかなった亀太郎は尊徳の高弟富田久助の教えを受け尊徳の死後は、嗣子尊行について学んだ。

箱館開港にともない、箱館奉行を置いてえぞ地の一部を直轄した幕府は、箱館付近の開墾を促進するため尊徳の指導を仰ごうとしたしかし、その話しが決まら夫取立方として、箱館在木古内村開墾取扱を命ぜられた。翌五九年、新妻とともに越後（新潟県）におもむき、二十四戸の移民を募集して木古内村の開墾にはげみ、田畑三十四ヘクタールを開いた。

ついで大野村に移り、四十八戸の農家を入れ、八年間に田畑百ヘクタールを開墾した。かれが石狩場所開発の重責を負わされたのは箱館奉行に差し出した〃蝦夷地全国永年開墾見込書〃に記した意見や、二宮尊徳の教えを守る報徳精神を実践した勤倹力行ぶりを高く評価されたためである。

積善の道を目的として　明治維新を迎えて北海道が大きく変容するとともに、亀太郎の身分も変化したかれは箱館裁判所附属から一八六九年には兵部省出張所開墾掛となり、苗穂村を開墾して、開拓使に引渡した。また会津藩士を移住させるという政府の方針により、その適地調査を委嘱されたときは、あたかも厳冬のさなかであったが、積雪をおかして当別の奥深くはいり、杜夫百余人を指揮のうえ、一万石（二千八百立方メートル）も伐木して移民受け入の準備を急いだ。しかし、方針が変わって入植見合わせとなったため、亀太郎の労苦はなんらむくいられなく事業中止となった。

相次ぐ制度、計画の変更から、開拓が思うように進行しないのに失望したかれは開拓判官島義勇からの勧めもことわり、一八七〇年、開拓使の使掌を最後に北海道を去った。

その後、若森（いまの茨城県の一部）島根、山梨県などに勤めて勧農、勧業の仕事にたずさわった。一八八一年には神奈川県会議員にあげられ、死去するまで連続四期当選した。

かれの足あとは、西は山陰から北はえぞ地におよんでいるが、郷里を除いて最も長く住んだのは北海道で十三年にわたっている。「人の一生は金もうけでない世を正し、人のためになる積善の道こそ、終生の目的でなければならぬ」と、いうのが亀太郎みづからの処世訓であった。

一八九七年十二月九日、県会の仕事で飛びまわっているうち急死したのも、亀太郎らしい最期であった。行年六十四歳。

庚戌年頭歌

清水専吉郎

庚　狛

社前を守る狛犬に朝日影　新年すがしみ〳〵のもとに

勅題　花

輪台を玉座に咲ける菊の花　礼儀正しく美しきかな

天守閣十周年と和歌集の想出

清水専吉郎

天守復興成り再現してはや十ケ年となれり、歳月流るゝ如しとや、時人を待たず、日頃を分かたずと先人も難ぜしもの、明治維新、廃藩置県、奉建革新等時代の変遷に小田原城も明治三年に取除かれ、関東震災、東亜大戦を経て困窮欠乏の時期を乗り越え　治まれる世となり、漸やく市民の間にも懐旧復興の希望抬頭し史談会興り　市民の天守閣復元が頻りに叫ばれ、資金の詰集等その切望に由り遂に、昭和三十五年五月に完成し　三層五階なる白亜の偉容　翠緑の函嶺の前に聳え　松樹の濃緑に映え、遠近の観客四季を通して曳きも切らず、織りなす賑ひを呈し　小田原の要害の名城近代の名物　清遊の観光の好個のものとなれり。

氏天守閣復元に際し、同時にその年に之を記念し天守閣和歌集を出版せしは聊か吾加祖先が関連する処あり、そは北条時代に豆州下田なる鵜島城の城主として守勢せしが天正十八年北条氏落城の際に清水右近将監正豊は小田原城内に詰める諸将と倶に行を共にし討死したりけり。系図に依れば巻末の結びに中野敬次郎氏の述べられし如く、旭将軍源義仲を遠祖としその次男源義晴が清水冠者と名乗り其子義純が信州戸倉山に清水太郎として城主となり数代の後伊豆に入って土着し一族が下田目良、長久保の三城に拠り　豊臣北条戦に奮戦せり、かゝる因縁を回想して氏城再建に記念せんと歌集の企となれり。

小田原城の累代の城主の子孫後裔なる北条雋八、北条克子、阿部正直、阿部正道、稲葉正凱、大久保忠言大久保敞子の諸公と小田原に関係ある有名歌人、文人即ち武島羽衣、川田順、吉川英治、長谷川如是閑、吉野秀雄、井上康文、三好達治の諸士、小田原の各学校の先生と生徒、一般の名士多般の人々の詠を載せ、時の市長鈴木十郎氏の序文を添え、中野敬次郎氏の後記に結び、之を後世に伝へんと念願し天守閣再現記念に編輯し置きたり、

所載の歌数は城主後裔九首、有名歌人武島羽衣五首、川田順十五首吉川英治、長谷川如是閑、文人八首、県市会人十五首名士三十六首、県歌人会四十五首、史談会二十三首、寺院十七首、有信会三十五首、城郭四十二首、清諷会五十六首、小田原短歌会六十三首、小笹会四十首、学校教師生徒十八校合計四百四十七首、天守閣内寄稿四十七首、公民館へ寄稿百〇六首、ボーイスカウト二十首、著者清水専吉郎三百十首、等々実に壱千三百余首載録す。

今や昭和四十五年を迎え天守閣再建十周年に際し、省みてよくも綴り置きたりと自快するものなり、今後五十年　百年後を想い做してその時の人が昭和三十五年の天守閣再建に遡りて氏集を繙き書中の人々を偲び又当時寄稿せる学童、学生が年を経て成人となり　各自その歌を省みて或は故人を偲び、父祖を語り天守閣に対し感懐深く思いを新らたにするものあらん。

際限なき歴史の流れの中の一時期となれる氏再建城の史実を和歌の詰集として残し置けるもの歴史の一助ともならば幸甚なり。

偶吟千首の巻末の歌に

投げ入れの梅のつぼみの目だちきて　寒の陽さしに匂ひはなちぬ

歴史随筆

古瓦

中里史子

時折の旅の途次、きわめて自然に入手した古瓦が少々ある。

昭和廿六年秋、法隆寺金堂壁画の模宗が、ほゞ完成して引上げるから、その前に見に来ませんかというある日本画家のお招きで、晩秋の奈良を訪づれたことがあった。

境内の普門院に数日泊めて頂いて、御殿の政岡よろしく書院で自炊した。その時の見聞は実に貴重で豊富で、数々の愉しい想出に満ちているが、それは又別の機会にゆづることにする。

若草伽藍跡で、ふと爪先に触れて何気なしに拾いあげたのが、小さい天平古瓦の破片！円の外側に二つ三つみえる鋸歯状の紋様で、それと解る程の小ささである。住職の許しを得て旅の記念として頂いて来た。すっかりかせて軽くなった小さな破片を掌にのせて、千年の風雨の磨滅を泌々といとしんだことであった。

×

同じ秋、法輪寺門前の道に敷きつめた瓦礫の中からうす朱い古瓦の破片を拾い上げた。雷火に焼けた五重塔の古瓦と思われる。五センチ位の三角の破片で、三方に淡い朱泥の彩色がみられ、白い土の中には点々と透明な石英の粒子がみえる何処の土を砕いて用いたのであろうか？かすかな条紋がみえる他、紋様は解らない、色がよく安定がいいので、秋の佗茶の薹置に用いたこともある。

×

姫路城の修復の完成した春、大勢の人の行き交ふ西ノ丸跡の広場で、ふと踏んだ石が、只の石ではなさそうなので、軽く指先で起してみたら、なんと五三の桐の紋様のハッキリ見える古瓦であった。厚さ三センチ長さ六センチ位のもので、桐の紋様の彫りが美しい。秀吉が羽柴姓の頃、三重の天守を築いた折のものであれば、三八〇年位前のものらしい。花見がてらの団体客がゾロ〳〵踏んでいった土の中から、私に呼びかけて呉れたようで、とても嬉しかった。

×

府中大国魂神社に詣うでた帰途、参道から斜めに林の方を横ぎろうとしたら、ふと変った石が目についた三センチ位の面に布目紋が見える。周囲の土が踏み固められていて掘り起すのに骨が折れた。その辺の小枝位では折れてしまう。やっと掘出してみると、長さ十二センチ位の布目瓦であった。まるで水成岩のように目がつんでいて、ずっしりと重く、軽くそりのある内側は細かい布目、外側はあらい目で、布の材質も織り方も違うことがハッキリ解る。色や磨滅度からみて、これは古代のものではなく後世のものかと思われた。

×

京都東山東福寺の山門の辺で、積上げた瓦礫の中から拾い上げた瓦は「福」と「寺」のハッキリみえる二つの破片で厚さは二センチ半位。現代のものらしいが文字がハッキリと出ているのが嬉しかった。

×

昨秋、金沢から京都へ出る途中、彦根に寄った。私にとって三十年ぶりの彦根城であった。天守からの戻り道、櫓門を出た石段の辺りで拾った古瓦は、ありふれたものであったが、旅の記念に旅嚢に収めた。巴紋らしい外側に珠文帯があり外輪は三センチ巾の円で囲み、厚みは三センチ半、厚みの部分に三本の深い溝のあるのが一寸珍らしい。

×

どれもこれも、さゝやかな旅の記念に過ぎないが、ふしぎと向うから私の眼に張び込んで来たものばかりである。何か探そうと思って、アチコチ歩いたことはなく、たゞ歩いて居て自然に足に触れたり、眼についたりしたものばかりで、その為に例え数歩でもわき道をしたことはない。いわば運命的な出合いでたゞ〳〵奇縁という他はない。それだけに私にとって嬉しい貴重な品々である。

関東大震災の想い出

額田喜代春

四十六年前の今日、大正十二年九月一日は朝から空はどんより蒸し暑く、いやな予感がしていた処、午前十

一時五十八分四十四秒グラグラッ、ドシン、マグネチュード七・九突如として、襲った大震動、私は小田原駅長室の片隅で、土曜日の昼飯をたべようと箸を持ったしゅん間、はじかれたようにテーブルの下に、もぐり避難していたが、だんだん震度は強くなり、床のコンクリートは亀裂、引出や棚の物は全部落下、建物は傾むいてくる。トテモ我慢できない。はうようにして駅長室前の築提の線路の上にたどりつき、時々襲ってくる余震と陥没する線路に怯えながら、枕木と枕木に両足を支え、レールにしがみついて、割れ目にはさまれぬよう警戒しながら、構内を見渡した処、旅客ホーム（当時の旅客ホームはアイランド式といって、一本で上下列車の荷発兼用であった。）と貨物積御場の上家根は、おしつぶされたようにペッチャンコ、レールは鉛のようにグニャ、グニャ線路は至る処で陥没、入換機関車は転覆、谷津方面への青橋も転落、寺町寄りの線路の築堤は崩れ落ちている。すると誰かが小峰山の開院宮家から火の手が見えるという、すわ大変だと数名の駅員と共にかけつけ、すでに消火に努めている警察署等に協力して消火に尽力したが、後に故人となられた大宮殿下から駅長は御綬章入の煙草入、私たちは金一封と謝礼のお言葉をいただいた。

宮家から見下ろす町のあちこちから黒煙りが盛んにあがっている。

当時の記録によると（旧小田原町）人口二万三千十四名のうち死亡者三百五十六名、負傷者五百二十五名、行方不明者四名、焼失家屋三千四百十戸、倒潰家屋三千八百八十戸、半潰家屋四百三十九戸であったというその後市制になり小田原市に合併された、旧足柄、早川、片浦、酒匂、国府津、下府中、田島等を合算すると死亡者千百四十五名、負傷者千百四十四名、行方不明者四名、焼失家屋三千四百四十四戸、倒潰竝に半潰家屋九十九戸であった。最も悲惨で目をおおいたくなったのは、旧片浦村米神及び根府川の両部落が聖ヶ岳連山付近の山くずれによる山津波によって、埋没し部落民六百二名の尊い生命を奪い百一名の負傷者を出したことで。これによって熱海線（当時は真鶴駅まで開通していた）は全線に亘ってほとんど破壊され、特に悲惨を極めたのは聖ヶ岳山の山がくずれてきて、根府川駅は駅舎と共に停車中の下り旅客列車諸共海中に転落し、乗客は殆んど死亡したようで、この転落した機関車の残骸が昭和九年十二月の丹那トンネル開通頃になって、十一年ぶりで海中から引き揚げられたが、すでに魚貝類の住み家になっていたようであった。なお非番で宿舎に寝ていた駅長は目がさめてみたら家諸共波の上に浮いていたので驚いたと私に話してくれた。当時の関東一府六県の被害は昭和四十三年九月十五日付毎日新聞「この百年」によれば死者九万九千三百三十一名、行方不明四万三千四百七十六名で、二十年前日露戦争の戦死者約五万人を大幅に上回り、なお四十四万七千百二十八戸が焼失したと報じている。また当時の交通機関の災害の一例としては各地で鉄道線路は波のように起伏したので、進行中の列車は大半が脱線或は転覆又はトンネルが崩壊して埋まる等、惨たんたるものでその総数二十四箇列車と即死者百二名に上ったのでも想像ができます。ふだんならこれだけでも、空前の大惨事として世間を騒がす大事件であった。

若しも現在このような恐ろしい地震が起きたとしたら常時百八十キロのスピードで走っている東海道新幹線であったら、もちろん新幹線支社では、沿線二十五箇所に感震器を置き、震度四以上の地震があれば、それを感知し、その作動によって、自動的に列車が停止するようになっている。しかし新幹線は急ブレーキがかかっても約二キロも走るのだから、路盤の陥没、軌道の亀裂などによって、不測の事態が起きる恐れは多分にあるといわねばならない。なお不通箇所の主なるものをあげれば、東海道線品川―御殿場間（当時は御殿場線回りであった）横須賀全線、熱海全線、横浜全線等で、車中や駅の大混雑ぶりを記憶をたどって記してみましょう。

突如として襲われた罹災民は、忽ち昨日に変る乞食（コジキ）同然の惨めな境遇につき落され、食うに物なく、飲むに水なく、見渡すかぎりの焼野原の中に、これから先の生きる途さえ見出せそうにもなくなったので、一先ず足を田舎の平和な、みよりを頼って行きたいのであるが、鉄道も道路も地震のために中断、故障百出、殊に東京、横浜等から雲霞のように押し寄せる避難民は、各駅に充ちあふれ、屈強の若者も容易に乗りこめない始末で、短かくても一日、長きは二日或は三日も駅構内の線路を枕にしたり、土の上に寝ころんで、時をすごし、乗車の機会をねらっているという有様で、その混雑の状態は真に名状しがたいものであった。

都心からの輸送列車は最初は一日四回か五回程度であったが、漸次増えて十数回になったが、田舎をさして落ちて行く避難民はだんだん激増して益々ひどくなるばかり、これ等の中には病人あり、怪我人あり、その外の人々とても、すべて不安のためにほほの肉は落ち黒く焼け焦げた顔をした憐れな人々で、駅の構内は超満員、二日や三日は飢餓と失望とたたかいながら線路に居ずくまっているが、列車の入換で、けたたましい警笛に追いまくられ、ほこりと煤煙（当時は石炭を焚く蒸気機関車ばかり）を頭から、かぶりながら汽車を待っている、やるせない気持、いろいろの意味で早く恐怖の災害地から脱がれ出ようと先を急ぐ人々ばかりであるから、列車が来るや津波のように我先きにと押し寄せて「アッ」という間にギッシリと詰ってしまう文字通り立すいの余地もなく、なかには心臓の強い人は、クサビでも打ちこむように窓から入って、

（以下つづきは次号へ）

あとがき

※新春恒例の史蹟めぐりは徳川家康にちなむ駿府を中心に行なわれることになった。

※同時にことしは、後北条氏落城後三百八十年をむかへるので、会としてもこれをしのぶ各種行事を催したい。会員の方々からもよきアイデアをよせて欲しい。

本号編集担当　立木望隆